



◆お道の歴史を伝える
百年前の「お土産」
今からおよそ百年前、教祖四十年祭頃の祭典模様四場面を一枚に収めた一枚刷り。
教祖四十年祭は大正十五（一九二六）年一月十五日、二十日、二十五日の三回に分けて執り行われた。期間中に発行された日刊『四十年祭時報』では、「よく売れた土産物」として「絵図面等が最も多い」と見出しを付け、一日に七、八千枚も売れた店があったと報じる。本図も、四十年祭に合わせて帰参者のお土産用に発行したものと思われる。明治二十九（一八九六）年四月の内務省訓令を受け、

かぐらづとめはお面を机上に置き、男性のみでつとめることとなった。加えて、おどおりも男性ばかりで、三曲の鳴物は三味線を薩摩琵琶に、胡弓は八雲琴に改器する。
さらに、一派独立請願運動の中、政府からの『みかぐらうた』を廃止せよという圧力を受け、度重なる折衝の末、舞楽『神の御国』を制定し、明治三十九年の教祖二十年祭で初めて奏舞され、同時に「信徒参拝心得」を神殿へ掲額するようになった。これらは苦渋の決断によって採用されたものであるが、明治四十一年十一月に一派独立を果たして以降も簡単には改められ

なかったということが、本図からよく分かる。
こうした一枚刷りは販売を目的にして制作されているため、正確な絵柄とは言えない。出版年次や題字のみを変更した同じ絵の一枚刷りの存在からも、商売という意識が感じ取れる。けれども年代順に図を見ていくと、史実に沿って、少しずつ建物の内部などが変化して描かれ、当時の情景を現在へ伝えてくれる。
作成された当初は、「お土産」としての価値であった一枚刷りが、今の私たちにとっては、天理教の歴史を窺い知れる有益な資料と言えるのである。
（天理図書館 石前奈緒香）

<天理図書館のお知らせ>

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

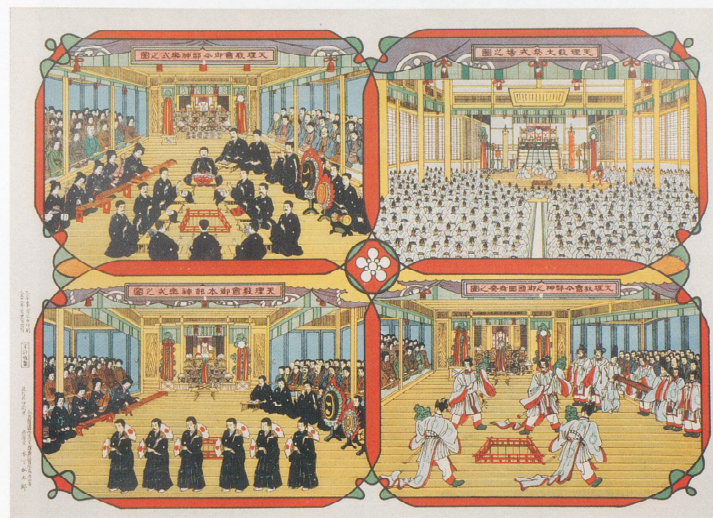
◇平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○12月の休館日：7日・14日・21日・24日／年末年始12月27日～1月6日

（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）

※最新の情報については公式HP、X（旧 Twitter）でご確認ください。

天理教大祭式場之圖



▶【てんりきようたいさいしきじょうのず】

1枚

大正15(1926)年

奈良県丹波市町 木下松太郎発行

縦39.5cm 横54.2cm

